鬼怒川で養鶏研究大会

日鶏協・関東甲信越地域協 鶏卵生産者や関係者ら280人が参加

日本養鶏協会関東甲信越地域協議会（会長＝都丸高志群馬県養鶏協会会長）は10月9日、栃木県日光市の日光きぬ川ホテル三日月で令和6年度養鶏研究大会を開き、鶏卵生産者や関連事業者ら約280人が参加した。

元木隆行副会長（㈱千葉県農業協会養鶏部会長）による開会宣言に続き、主催者を代表して都丸会長が昨年の養鶏研究大会からの1年について、①一昨年の高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）発生による約1700万羽の殺処分と急激な生産量の低下、それによる卵価の高騰と需給動向の変化に振り回された②高卵価にもかかわらず、新たな設備投資が想像以上に少なかった――と振り返った。

また、（一社）日本種鶏孵卵協会の「鶏ひなふ化羽数統計」については、今年1月から算出方法を変更し、より正確な仕付け羽数の公表に努めていることや、会員孵化場から報告された今後半年間の受注状況を基にした仕付け羽数を予測していることを説明し、「この予測と実態の突合を何度か繰り返していくと、鶏卵生産量の予測が今よりも正確にできるのではないかと期待している」と述べた。

そのうえで「今年も新たなHPAIシーズンを迎えようとしており、防疫上の問題や業者数の減少がある中で、本日のように280人という多くの人数が一堂に会して業界の問題を語り合い、情報を交換しあう機会はなかなかあるものではない」とし、養鶏研究大会の設営に尽力した栃木県養鶏協会の関係者に謝意を表した。

開催県である栃木県養鶏協会の大室憲一会長（㈲大室養鶏場）は「皆様に満足していただけるよう開催を検討し、精一杯準備してきた。それでも至らない点があると思うが、本日は大いに楽しんでほしい」などと歓迎した。

来賓を代表して栃木県農政部畜産振興課の谷山和雄課長と（一社）日本養鶏協会の彦坂誠副会長（（一社）神奈川県畜産会養鶏部会長）が祝辞を述べた。この中で彦坂副会長は「養鶏研究大会を実施しているのは北日本地域協議会と関東甲信越地域協議会の2つだけであると。これは私見になるが、このような養鶏研究大会が他の地域協議会にも広まり、多くの生産者だけではなく関連事業者や関連団体の人が集まり、それぞれの地域で広く深く意見交換できるような形ができればいいなと思っている」と述べた。

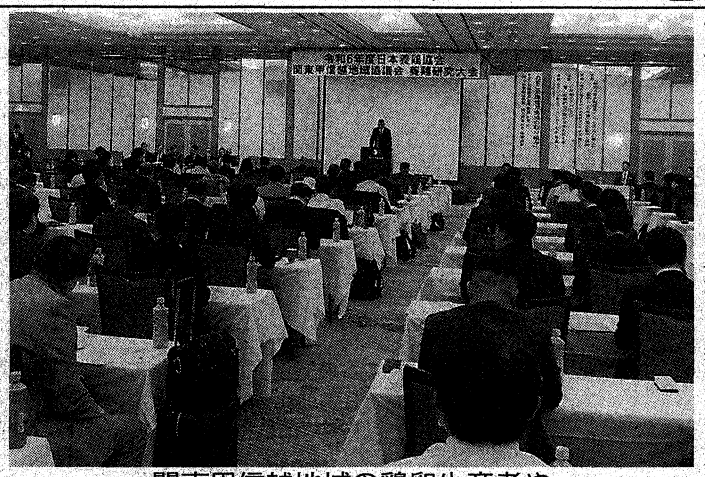
養鶏研究大会では、三州食品㈱の岩月顕司社長が「令和4年大規模鳥インフルエンザの発生が起こした今後の需給動向と課題」、元テレビ朝日アナウンサーの松井康真氏が「37年間のテレビマン～常に能動的な行動が未来を変える～」と題して講演し、埼玉県養鶏協会の齋藤大天会長（㈱愛鶏園会長）が「たまご知識普及会議の取り組み」について情報提供した。

岩月社長は、三州食品グループでは「Farm to Table」を合言葉に、養鶏から鶏卵加工までの一貫生産体制で①卵の生産・販売事業②液卵事業③鶏卵加工品事業④粉末卵輸入販売事業⑤製菓OEM事業――に取り組んでいると紹介するとともに、HPAIが大量発生した令和4年シーズン後の鶏卵需給動向について説明した【講演要旨は後日掲載予定】。

松井氏はテレビ朝日に入社後、「ミュージックステーション」や「ニュースステーション」、プロ野球中継などの番組に出演したことや、管理職に就いた後は自衛隊、航空機事故、原発事故の報道について自主的に勉強したことを紹介。趣味のプラモデルづくりを生かして福島第一原発1号機原子炉建屋の模型を作り、報道番組で使用したことや、ヘリコプターから実況中継した2015年9月の鬼怒川決壊（茨城県常総市）のジオラマ模型を作り、大災害の記憶を残した取り組みを話した。

齋藤会長は、卵の素晴らしさを一般の人にも分かりやすく伝えるメッセージとして「たまごの5つの価値」（①スーパーフード〈栄養・健康効果〉②みんなを笑顔にするマルチプレーヤー〈おいしさ・楽しさ〉③生食文化を支えるテクノロジー〈安全・安心〉④地球環境にやさしい〈サステナビリティ〉⑤作り手の誇りと情熱〈生産者の想い〉）を紹介。訴求ツールとして制作した動画や「クイズで発見！たまごのひみつ」などのコンテンツは『たまペディア』（https://biz.tamapedia.net/）からダウンロードできるため、「ぜひ活用してほしい」と呼びかけた。

次回開催の千葉県を代表して元木副会長が「来年度の参加をよろしくお願いする」と述べて閉会し、別室での懇親会ではなごやかに歓談した。


関東甲信越地域の鶏卵生産者や関連事業者らが一堂に会した

都丸高志会長

大室憲一会長

岩月顕司社長

齋藤大天会長

松井康真氏